

國木田独歩作品集（第三卷）

國木田独歩著

國木田獨步作品集

第二卷

創元社

國木田獨步作品集 第二卷

定價 一九〇圓



著者

國木田獨步

發行者

東京都中央区日本橋小舟町二ノ四
矢部良策

印刷者

東京都文京区久堅町一〇八
大橋芳雄

發行所

株式會社 創元社

昭和二十六年七月二十七日 初版印刷
昭和二十六年七月三十一日 初版發行

電話茅場町(66)二〇六四・四〇八三・五二六三
振替東京一五六五・大阪五七〇九九

共同印刷・鈴木製本

○ 非凡なる凡人……………	三	戀を戀する人……………	一五〇
○ 悪魔……………	一三	泣き笑ひ……………	一六一
○ 馬上の友……………	一五	疲勞……………	一六六
○ 第三者……………	一五〇	暴風……………	一七〇
○ 女難……………	一七一	窮死……………	一九四
正直者……………	一九六	渚……………	二〇二
富岡先生……………	二〇八	竹の木戸……………	二〇七
春の鳥……………	二一七	二老人……………	二二三
岡本の手帳……………	二二五	二少女……………	二三〇
○ 號外……………	二四三	解説 (福田恆存)……………	二九九

小
說
集
(二)

非凡なる凡人

上

五六人の年若い者が集つて互に友の上を尊し合つたことが有る、其時、一人が――

僕の小供の時からおともの友に桂正作かうせうさくといふ男がある、今年二十四で今は横濱よこはまの或會社に技手として雇はれ専ら電氣事業に従事して居るが、先づ此男ほど類の異つた人物はあるまいかと思はれる。

非凡人ではない。けれども凡人でもない。さりとて偏物へんぶつでもなく、奇人でもない。非凡なる凡人といふが最も適評かと僕は思つて居る。

僕は知れば知るほど此男に感心せざるを得ないのである。感心すると言つた處で、秀吉とか、ナポレオンとか

其他の天才に感心するのとは異うので、此種の人物は千百歳に一人も出るか出ないかであるが、桂正作の如きは平凡なる社會が常に産出し得る人物である、又た平凡なる社會が常に要求する人物である。であるから桂のやうな人物が一人殖へればそれだけ社會が幸福なのである。僕の桂に感心するのは此意味に於てである。又僕が桂をば非凡なる凡人と評するのも此故である。

僕等が未だ小學校に通つて居る時分であつた。或日、其日は日曜で僕は四五人の學校仲間と小松山へ出かけ、戦争の眞似を仕て、我こそ秀吉だとか義經だとか、十三四にもなりながら馬鹿げた腕白を働らいて大あばれに荒れ、遂に喉が渴かわいて來たので、山の直ぐ麓にある桂正作の家の庭へ、裏山からドヤ／＼と駈下りて、案内も乞はず、いきなり井戸邊いどべに集まつて我勝われがに水を汲ひで呑のんだ。

すると二階の窓から正作が顔を出して此方を見て居る。僕はこれを見るや

「來ないか。」と呼んだ。けれども平常にない眞面目くさつた顔つきをして頭を横に振つた。腕白の方でも人並のことを仕てのける桂正作、不思議と出て來ないので、僕等も強ては誘はず、其儘又た山に駈登つて了つた。

騒ぎ疲ふれて衆人散々に我家へと歸り去り、僕は一人桂の宅に立寄つた。黙つて二階へ上つて見ると、正作は「テーブル」に向ひ椅子に腰をかけて、一心になつて何か讀んで居る。

僕は先づ此「テーブル」と椅子のことから説明しやうと思ふ。「テーブル」といふは粗末な日本机の兩脚の下に續臺をした品物で、椅子とは足續の下に箱を置いたゞけのこと。けれども正作は眞面目で此工夫をしたので、學校の先生が日本流の机は衛生に悪いと言つた言葉を成程と感心して直ぐこれだけのことを實行したのである。

そして其後常に此椅子テーブルで彼は勉強して居たのである。其テーブルの上には教科書其他の書籍を丁寧に重ね、筆墨の類まで決して亂雑に置いてはない。で彼は日曜の好い天氣なるにも關はらず、何の本か、脇目もふらないで讀んで居るので、僕は其傍に行つて「何を讀んで居るのだ。」と言ひながら見ると、洋綴の厚

い本である。

「西國立志編だ。」と答へて顔を上げ、僕を見た其の眼ざしは未だ夢の醒めない人のやうで、心は猶ほ書籍の中にあるらしい。

「面白いかね？」

「ウシ面白い。」

「日本外史と何方が面白い。」と僕が問ふや、桂は微笑を含んで、漸く我に復り、何時の元氣の可い聲で、

「それやア此の方が面白いよ。日本外史とは物が異う。

昨夜僕は梅田先生の處から借りて來てから讀みはじめたけれど、面白うて止められない。僕は如何しても一冊買うのだ。」と言つて嬉しくつて堪らない風であつた。

其後桂は遂に西國立志編を一冊買ひ求めたが、其本といふは粗末至極な洋綴で、一度讀み了らない中に既にバラ／＼になりさうな代物ゆゑ、彼はこれを丈夫な麻絲で綴直した。

此時が僕も桂も數へ年の十四歳。桂は一度西國立志編の美味を知つて以後は、何度此書を讀んだか知れない、殆ど暗誦するほど熟讀したらしい、そして今日と雖も常にこれを座右に置いて居る。

げに桂正作は、活た西國立志編と言つてよからう、桂自身でさう言つて居る。

「若し僕が西國立志編を讀まなかつたら如何であつたらう。僕の今日あるのは全く此書のお蔭だ。」と。

けれども西國立志編（スマイルスの自助論）を讀んだものは洋の東西を問はず幾百萬あるかも知れないが、桂正作のやうに、「余を作りし者は此書なり」と明言し得る者は果して幾人あるだらう。

天が與へた才能からいふと桂は中位の人たるに過ない。學校に於ける成績も中等で、同級生の中、彼より優れた少年は幾等も居た。又た彼は可なりの腕白者で、僕等と一所に随分荒れたものである。それで學校に於ても郷黨に在ても、特に人から注目せられる少年ではなかつた。

けれども天の與へた性質から言ふと、彼は率直で、單純で、そして何處かに壓ゆべからざる勇猛心を持つて居た。勇猛心といふよりか、敢爲の氣象と言つた方が可からう。則ち一轉すれば冒險心となり、再轉すれば山氣となるのである。現に彼の父は山氣のために失敗し、彼の兄は冒險の爲に死んだ。けれども正作は西國立志編のお蔭で、此氣象に訓練を加へ、堅實なる有爲の精神とした

のである。

兎も角、彼の父は尋常の人ではなかつた。やはり昔の武士で、維新の戦争にも出て一かどの功をも立てたのである。体格は骨太の頑丈な作り、其顔は眼ざり長く切れ、鼻高くし一見して堂々たる容貌、氣象も武人氣質で、容易に物に屈しない。であるから若し武人のまゝで押通したならば、少くとも藩閥の力で今日是人にも知られた將軍になつて居たかも知れない。が、彼は維新の戦争から歸ると直ぐ「農」の一字に隠れて了つた。隠れたといふよりか出直したのである。そして「殖産」といふ流行語にかぶれて遂に破産してしまつた。

桂家の屋敷は元來、町に在つたのを、家運の傾むくと共に之を小松山の下に運んで建て直したので、其時も僕の父などは斯う言つて居た、あれほどの立派な屋敷を打壊さないで其まゝ人に譲り、其金で別に建てたら可からうと。けれども、桂正作の父の氣象は此一事でも解つて居る。小松山の麓に移つてこの方は、純粹の百姓になつて正作の父は働いて居るのを僕は屢々見た。

であるから正作が西國立志編を讀み初めた頃は、其家政は餘程困難であつたに違ない。けれども其家庭には何

時も多少の山氣が浮動して居たといふ證據には、正作が或日僕に向つて、宅には田中鶴吉の手紙があると得意らしく語つたことがある。其理由は桂の父が、當時世間で大評判であつた田中鶴吉の小笠原殖産事業にひどく感服して、わざ／＼書面を送つて田中に敬意を表した處、田中が又た直ぐ禮狀を出して其が桂の父に届いたといふ一件、又或日正作が僕に向ひ、今から何ヶ月とかすると蛤を澤山御馳走するといふから、何故だと聞くと、父が蛤の繁殖事業を初め、種を取寄せて濱に下したから遠からず、此附近は蛤が非常に採れるやうになると答へた。先づ此等の事で家庭の様子も想像することが出来るのである。

父の山氣を露骨に受けついで、正作の兄は十六の歳に家を飛び出し音信不通、行方知れずになつて了つた。布哇に行つたとも言ひ、南米に行つたとも噂させられたが、實際のことは誰も知らなかつた。

小學校を卒業するや、僕は縣下の中學校に入つて了ひ、暫時く故郷を離れたが正作は家政の都合でさういふわけにゆかず、周旋する人があつて某銀行に出ることになり給料四圓か五圓かで某町まで二里の道程を朝夕

往復することになつた。

間もなく冬期休課になり、僕は歸省の途に就いて故郷近く車で來ると、小さな坂がある、其麓で車を下り手荷物と、自分のステッキ一本で坂を登りかけると、僕の五六間さきを行く少年がある。身に古ぼけたトランプを着て、手に古ぼけた手提カバンを持って、靜に坂を登りつゝある、其姿が如何も桂正作に似て居るので、「桂君じゃアないか。」と聲を掛けた。後を振り向いて破顏一笑したのはまさしく正作。立ち止つて僕をまち、「冬期休課になつたのか。」

「どうだ君は未だ銀行に通つてゐるか。」

「ウン、通つてゐるけれども少し面白くない。」

「どうしてや？」と僕は驚いて聞いた。

「どうしてと言ふ譯もないが、君なら三日と辛棒が出来ないだらうと思ふ。第一僕は銀行業からして僕の目的じゃないのだから。」

二人は話しながら歩いた、車夫のみ先へやり。

「何が君の目的だ。」

「工業で身を立てる決心だ。」と言つて正作は微笑し、「僕は毎日此道を往復しながら色々考へたが、發明に

越す大事業はないと思ふ。」

ワットやステブンソンやエヂソンは彼が理想の英雄である。そして西國立志編は彼の聖書である。

僕の黙言で頷くを見て、正作は更に言葉をつぎ、

「だから僕は來春は東京へ出やうかと思つて居る。」

「東京へ？」と驚いて問ひ返した。

「さうサ東京へ。旅費は最早出來たが、彼地へ行つて三月ばかりを食べる丈けの金を持って居なければ困るだらうと思ふ。だから僕は父に頼んで來年の三月までの給料は全部僕が貰うことにした。だから四月早々は出立るだらうと思ふ。」

桂正作の計畫は總て此筆法である。彼は随分少年に有勝な空想を掻くけれども、計畫を立てゝこれを實行する上に就いては少年の時から今日に至るまで、少しも變らず、一定の順序を立てゝ一步步々と着々實行して遂に目的通りに成就するのである。無論これは西國立志編の感化でも有う、けれども一つには彼の性情が祖父に似て居るからだと思はれる。彼の祖父の非凡な人であつたことを今こゝで詳しく話すことは出來ないが、其一を言へば眞書太閤記三百卷を寫すに十年計畫を立てゝ遂に見事寫

し終つたことがある。僕も桂の家でこれを實見したが今でも其氣根の大きいなるに驚いて居る。正作は確に此祖父の血を受けたに違いない。若くは此祖父の感化を受けたらうと思ふ。

途上種々の話で吾々二人は夕暮に歸宅し、其後僕は毎日のやうに桂に遇つて互に將來の大望を語り合つた。冬期休暇が終り愈々僕は中學校の寄宿舎に歸るべく故郷を出立する前の晩、正作が訪ねて來た。そして言ふには今度會うのは東京だらう。三四年は歸郷しない積りだからと。僕も其積りで正作に離別を告げた。

明治二十七年の春、桂は計畫通りに上京し、東京から二三度手紙を寄したけれど、何時も無事を知らずばかりで別に着京後の様子を告げない。又た故郷の者誰も如何して正作が暮して居るか知らない、父母すら知らない。唯だ何人も疑はないことが一つあつた曰く桂正作は何等かの計畫を立てゝ其目的に向つて着々と歩を進めて居るだらうといふ事實である。

僕は三十年の春上京した。そして宿所が定まるや、早速築地何町番地、何の某方といふ桂の住所を訪ねた。此時二人は既に十九歳。

午後三時頃であつた。僕は築地何町を隅から隅まで探して、漸くのことゝ桂の住家を探し當た。容易に分らぬも道理、某方といふ其某は車屋の主人ならんとは。兎ある横町の貧乏な家ばかり並んで居る中に挾つて九尺間口の二階屋、其二階が「活る西國立志編」君の巢である。

「桂君といふ人が貴様の處に居ますか。」

「へい居らつしやいます、あの書生さんでしよう。」との山の神の挨拶。聲を聞きつけてミシ／＼と二階を下りて來て「ヤア」と現はれたのが、一別以來三年會はなんだ桂正作である。

足も立てられないやうな汚い疊を二三枚歩いて、狭い急な梯子段を登り、通された坐敷は六疊敷、煤けた天井低く頭を壓し、疊も黒く壁も黒い。

けれども黒くないものがある。それは書籍。

桂ほど書籍を大切にすることは少ない。彼は如何なる書物でも決して机の上や、座敷の真中に放擲するやうなことなどは仕ない。斯う言ふと桂は書籍ばかりを大切に

するやうなれど必ずしもさうでない。彼は身の周圍のものを總て大事にする。

見ると机も可なり立派。書籍箱も左まで黒くない。彼は其の必要品を粗略にするほど、東洋豪傑風的美點も癖も受けて居ない。今の流行語で言ふと、彼は西國立志編の感化を受けただけに頗るハイカラ的である。今にして思ふ、僕はハイカラの精神の我が桂正作を支配したことを皇天に感謝する。

机の上を見ると、教科書用の書籍その他が、例の如く整然として重ねてある。其他周圍の物總てが皆な其處を得て、キチンとして居る。

室の下部にして黒く暗懨なるを憂うる勿れ、桂正作は其主義と、其性情に依つて、總て此等の黒くして暗懨たるものをば化して純潔にして高貴、感嘆すべく畏敬すべきものと爲して居るのである。

彼は例の如く最も快活に胸懷を開いて語つた。僕の問うがまに／＼上京後の彼の生活をば、恥もせず、誇りもせず、平易に、率直に、詳しく話して聞かした。

彼ほど虚榮心の少ない男は珍らしい。其の境遇に處し、其の信ずる處を行なうて、それで満足し安心し、そ

して勉勵して居る。彼は決して自分と他人とを比較しない。自分は自分だけのことを爲して、運命に安んじて、そして運命を開拓しつゝ進んで行く。

一別以來、正作の爲したことを聞くに實に此通りである。僕は聞いて居る中にも益々彼を尊敬する念を禁じ得なかつた。

彼は計畫通り三ヶ月の糧を蓄へて上京したけれども、坐してこれを食べる男ではなかつた。

何かな面白ろい職を得たいものと、先づ東京中を足に任かして遍巡り歩いた。そして思ひついたのは新聞賣と砂書き。九段の公園で砂書きの翁を見て、彼は直ちにこれと物語り、事情を明して弟子入を頼み、それより二三日の間稽古をして、間もなく大道の傍に坐り、一錢、五厘、時には二錢を投げて貰つて出駄目を書き、幾錢かつつの收入を得た。

或日、彼は客のなき儘に、自分で勝手なことを書いては消し、ワット、ステブenson、などいふ名を書いて居ると、八歳ばかりの男兒を連れた衣裝の善い婦人が前に立た。「ワット」と兒供が讀で、「母上、ワットとは何のこと？」と聞いた。桂は顔を擧げて小供に解り易いやう

に此大發明家のことを話して聞かし、「坊様も大きなつたら斯な豪い人におなりなさいよ。」と言つた。さうすると婦人が「失禮ですけれど」と言ひつゝ二十錢銀貨を手渡して立ち去つた。

「僕は其銀貨を費はないで未だ持て居る」と正作は言つて罪のない微笑をもらした。

彼は斯く勞働して居る間、其宿所は木賃宿、夜は神田の夜學校に行つて、専ら數學を學で居たのである。

日清の間が切迫して来るや、彼は直ぐと新聞賣になり、號外で意外の金を儲けた。

斯て其歳も暮れ、二十八年の春になつて、彼は首尾よく工手學校の夜學部に入學し得たのである。

且つ問ひ且つ聞いて居る中に夕暮近くなつた。

「飯を食ひに行かう！」と桂は突然言つて、机の抽斗から手早く褄口を取出して懷へ入れた。

「何處へ？」と僕は驚いて訊ねた。

「飯屋へサ。」と言つて正作は立かけたので、

「イヤ飯なら僕は宿屋へ歸つて食ふから心配しないほうが可いよ。」

「まあそんなことを云はないで一所に食ひ給へな。もし

て今夜は此處へ泊り給へ。未だ話が澤山残つて居る。」

僕も其意に従がひ、二人して車屋を出た。路の二三丁も歩いたが、桂は其間も愉快に話しながら、國元のことなど聞き、今年の中に一度故郷に歸りたいなど言つて居た。けれども僕は桂の生活の模様から察して、三百里外の故郷へ往復することの到底、言ふべくして行ふべからざるを思ひ、別に氣にも留めず、歸れたら一度歸つて父母を見舞ひ給へ位の軽い挨拶を爲て置いた。

「此處だ！」と言つて桂は先に立つて、繩暖簾を潜つた。僕は喫驚して、暫時ためらつて居ると中から

「オイ君！」と呼んだ。爲かたが無いから入ると、桂は桂よき場處に陣取つて笑味を含んで此方を見て居る。見廻はすと、桂の外に四五名の勞働者らしい男が居て、長い食卓に着いて、飯を食ふ者、酒を呑むもの、殊の外靜謐である。二人差向ひで卓に倚るや

「僕は三度々々此處で飯を食ふのだ。」と桂は平氣で言つて「君は何を食ふか。何でも出来るよ。」

「何でも可い、僕は。」

「さうか、それでは」と桂は女中に向つて二三品命じたか、其名は符牒のやうで僕には解らなかつた。暫時くす

ると、刺身 煮肴、煮み、汁などが出て飲を盛つた茶碗に香物。

桂は美味さうに食ひ初めたが、僕は何となく汚らしい氣がして食ふ氣にならなかつたのを無理に食ひ初めて居ると、思はず涙が逆上して來た。桂正作は武士の子、今や彼が一家は悲運の底にあれど、要するに彼は紳士の子、それが下等社會と一所に一膳めしに舌打ち鳴らすかと、思つて涙含んだのではない。決してさうではない。いや／＼乍ら箸を取つて二口三口食ふや、卒然、僕は思つた、あゝ此飯は此有爲なる、勤勉なる 獨立自活して自ら教育しつゝ、ある少年が、勞働して儲け得た金で、心ばかりの馳走をして呉れる好意だ、それを何ぞや不味さうに食ふとは！ 桂は此處で三度の食事をするではないか、これを嫌々ながら食ふ自分は彼の竹馬の友と言はれうかと、さう思ふと僕は思はず涙を呑んだのである。そして僕は急に胸がすが／＼して、桂と共に美味く食事をして、繩暖簾を出た。

其夜二人で薄い布團に一所に寝て、夜の更けるのも知らず、小さな豆ランプの覺束ない光の下で、故郷のことや他の友の上のことや、將來の望を語り合つたことは僕

今でも思ひ起すと、樂い懐しい其夜の様が眼の先に浮んで来る。

其後、僕と桂は互に往來して居たが早くも其年の夏期休課が來た。すると一日、桂が僕の下宿屋へ來て、

「僕は故郷へ歸て來うかと思ふ。實は最早決定して居るのだ。」といふ意外な言葉。

「それは可いけれども君……」と僕は直ぐ旅費等のことを心配して口を開くと、

「實は金も出來て居るのだ。三十圓ばかり貯蓄して居るから、往復の旅費と土産物とで二十圓有つたら可からうと思ふ。三十圓悉的費つて了うと後で困るからね。」といふのを聞いて僕は今更ながら彼の用意のほどに感じ入つた。彼の話に依ると二年前から既に歸省の計畫を立て、其積で貯金したとのこと。

どうだ諸君！ 斯ういふことは出來易い様で、なかなか出來ないことだよ。桂は凡人だらう。けれども其爲すことは非凡ではないか。

此處で僕も大に歡んで彼の歸國を送つた。彼は二年間の貯蓄の三分の二を平氣で擲つて、錦繪を買ひ、反物を買ひ、母や弟や、親戚の女子供を喜ばすべく、欣々然と

して新橋を出立つた。

翌年、三十一年に目出度學校を卒業し、電氣部の技手として横濱の會社に給料十二圓で雇はれた。

其後今日まで五年になる。其間彼は何をしたか。たゞ其職分を忠實に勤めただけか。さうでない！

彼は大きいなる事を爲して居る。彼の弟が二人あつて、二人とも彼の兄、逃亡した兄に似て手に合はない突飛物、一人を五郎と云ひ、一人を荒雄といふ。五郎は正作が横濱の會社に出たと聞くと、國元を飛び出して、東京に來た。正作は五郎の爲めに、所々奔走して或は商店に入れ、或は學僕としたけれど、五郎は到る處で失敗し、到る處を逃出してう。

然ども正作は根氣よく世話をして居たが、遂に五郎を自分の傍に置き、種々に訓戒を加へ、西國立志編を繰返して讀し、そして工手學校に入れて了つた。僅の給料で自ら食ひ、弟を養ひ、三年の間、辛苦に辛苦を重ねた結果は卅四年に至つて現れ、五郎は技手と成て今は東京芝區の某會社に雇はれ、眞面目に勤務して居るのである。荒雄も又た國を飛び出した。今は正作と五郎と二人で此の弟の處置に苦心して居る。

今年の春であつた。夕暮に僕は横濱野毛町に桂を訪ねると、宿の者が「桂さんは未だ會社です」と言ふから、會社の様子も見たく、其足で會社を訪ふた。

桂の仕事を爲て居る場處に行つて見ると、僕は電氣の事は詳しく知らないから十分の説明は出来ないが、一本の太い鐵柱を擁して數人の人が立て居て、正作は一人其鐵柱の周圍を幾度となく廻つて熱心に何事か爲て居る。最早電燈が點て白晝の如く此の一群の人を照して居る。人々は黙して正作の爲る處を見て居る。器械に狂の生じたのを正作が見分し、修繕して居るのらしい。

桂の顔、様子！ 彼は無人の地に居て、我を忘れ世界を忘れ、身も魂も、今其の爲しつゝある仕事に打込んで居る。僕は桂の容貌、斯くまでに眞面目なるを見たことがない。見て居る中に、僕は一種の壯嚴に打れた。

諸君！ 何卒か僕の友のために、杯をあげて呉れ給へ、彼の將來を祝福して！

惡魔

「如何な奴？」

「まア、奴なソで。口が悪いのねえ。」

「そんなら如何な先生？」

「私、知らないワ、如何なソで。」

「だつて見たのだらう。」

「先刻御挨拶を仕たの。」

「だから如何な人だか訊くのサ。」

對手の君子は急に眞面目な顔をして自分を凝視め、微に吐息をして、「大變學者だツてねえ。」

「誰がそう言ツた。自分で言ツたのだらう。」「御自分で何でそんなこと被仰るもんですか。宅の母上がさう言つ

ててよ。」「どうせ斯な山の中に住みたいといふンだから變物の青瓢箪だらう。」

「武蔵變物じやないワねえ」と君子は言ひ捨て、駈け出したが、五六歩で立どまり、薄爾笑つて「日が暮れたら遊びにお出でなツ。必然！」

「知らないッ！」と自分は其まゝ裏山に登つて小松原を歩いて居たが、何となく胸がむしやくしやす。君子は十八、自分は二十從兄妹同士で仲善で、自分は誰よりも君子が好き、君子も自分が好であつたらしいのが、今度、淺海の一家突然、君子の宅の母家を借りて住むことになり、其總領息子の謙輔、東京に久しく留學して居た青年が歸つて來るといふので一週間も前から叔母を初め君子姉妹までが噂をして待つて居て、それで今日の朝、慇々謙輔が着いたとのこと、君子に遇て見ると嬉しさうに、それはくして居る積に觸らざるを得ない。

元來山内家と自分の布浦家とは古くからの親戚で某